

『新参者』（東野圭吾著）を読んでみた。英国のダガー賞の最終候補に残った作品ということで読むことにした。2010年の「このミステリーがすごい」で1位を記録している。また2010年4月にTBSでTVドラマ化されている。加賀恭一郎シリーズとしての第8作目。著者は『放課後』で江戸川乱歩賞を受賞し、『容疑者Xの献身』で直木賞を受賞する。

日本橋小伝馬町に住む一人暮らしの40代の女性翻訳家が自分のアパートで絞殺される。その犯人を追って、加賀恭一郎が奮闘する。新参者というように最近この地区に異動になったようだ。地域を知るためにラフな格好をして、小まめに商店街を回っている様子が描かれる。本篇は読んでも、読んでも犯人像がちっとも明確にならず、町内の人間関係のもつれを露わにして、事件とは関係ないもめ事をお節介にも解決してゆく（人間味は溢れているが・・・）。どうも何年もかけて書かれた小説で、書きながら犯人を作り上げていったようである。各短編が各一章となり、章ごとに代わっていく主人公となる人物の視点を通じて加賀の捜査の意図が明らかとなり、彼が事件に直接関係ない周辺人物の小さな謎を解いていくうち徐々に本来の事件解決が浮かび上がり、最後に解決するという流れとなっている。因みにアリバイ捜査に向かうときには町内の名物を持参する（こんな刑事、居るかな？）。

話はこんな風に進む。

- ・被害者の住居を訪れた保険外交員のアリバイ調査。
- ・被害者宅にあった人形焼を買ったかどうかを尋ねられる奉公人のアリバイ調査。
- ・嫁姑問題が深刻化している家での、被害者宅にあったキッチンバサミの調査。
- ・愛犬の散歩時に時計店の主人が被害者に会ったという真偽。
- ・母親が自宅マンションで殺害されたという知らせを受けた劇団員の息子の衝撃とそこからの調査。
- ・遺体の第一発見者となった翻訳家の友人の行動。
- ・被害者の元夫の、愛人であると噂される女性との真の関係。離婚のタイミング。
- ・民芸品屋から最近独楽を購入した客がいるかどうかを調べて、独楽を回す紐が殺害と関係するかを捜査する。
- ・最終章では、これまでの章で点として描かれた謎や事項が線として繋がり、刑事の視点から事件解決までの流れが描かれる。

本作がダガー賞に取り上げられた理由はなんだろうか。

- ・ 加賀恭一郎という探偵像の魅力が大きい。
日本的な礼節と鋭い洞察力を併せ持つ彼は、欧米の読者にとって新鮮で魅力的なキャラクターと映った。彼の人間味と静かな情熱が、国境を越えて共感呼んだ。

- 構成の巧みさ
物語は一つの殺人事件を軸に、複数の短編的エピソードが連なる構造になっており、それぞれが独立しながらも全体として緻密に絡み合うスタイルが「日本的でありながら普遍的」と評価された。
- 翻訳の質の高さ
翻訳が、原作の繊細なニュアンスや文化的背景を丁寧に再現し、英語圏の読者にも違和感なく伝わる仕上がりがかった。

加賀恭一郎シリーズをこれから少しずつ読んでみよう。